

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

忘れられぬ年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤田, 修治 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/442

[随想]

忘れられぬ年

東京海洋大学 名誉教授 澤田 修治

The Years Which are not Forgotten in My University Life

Shuuji SAWADA

こういうところですから、39年と6カ月に及ぶ大学生活を中心に、忘れられない年をいくつか取り上げてお話しさせていただきます。

私が旧東京商船大学に採用されたのは、修士を終了した1970年の4月ですが実際に赴任したのは翌年の71年4月です。当時はむさくるしい男ばかりの、あまりよい印象が無い大学の話であったので、すこしわがままを言わせてもらいました。東京での最初の住まいは原宿駅前にあった父親の社宅アパートで竹下通りのすぐ近くでした。何度か散歩に行きましたが当時は何の変哲もないさびれた商店街でした。また道路を隔てた向かいに外人がよく利用するコープオリンピア（今もあるようです）というスーパーがあり、物珍しさもあってよく行きました。失敗談としては大きなトマトジュースの缶を買ってきて穴をあけ飲もうとしたのですがジュースがほとんど出てきません。シチューなどに使うホールというタイプのものに出会った最初です。

71年でなにより忘れられないのは8月15日、大学近くの居酒屋で一杯やりながら夕飯を食べていると、テレビに当時のニクソン大統領の顔が映り、金とドルの交換停止を宣言しているニュースを見たことです。いわゆるニクソンショックです。第2次世界大戦後のパクスアメリカーナ（アメリカによる平和または支配）の終焉の始まりでした。40年後の今年の8月にはアメリカ国債の格付け引き下げなどによる記録的な円高もあり、そんなことがあらためて思い出されます。この年の12月には1ドル360円が308円に切り上げられ、以後40年に及ぶ円高行進曲が始まりました。ちなみに現在のおおよそ77円というのは308円のちょうど4倍のレートです。40年で4倍とは何かどこかで仕掛けがあるのじゃないかという気さえします。

大学生活で次に忘れられない年は1976年です。73年の中東戦争を契機とした74年の第1次オイルショックも忘れ難いものですが、大学生活にもそろそろ慣れてずうずうしさも出てきたころで、一度、はじめての海外旅行をしてみよう、というのはありきたりでは面白くないということで、飯野海運にお願いしてタンカーに乗せてもらい、その足で欧州旅行をしようという計画を立てました。タンカーには一般人は乗せられないということで、アプレンティス・クラーク（見習書記）という資格で船員手帳を作り乗せてもらいました。見習書記といっても士官待遇で、クウェートの船員用のゲストハウスはホテル並みの個室でした。乗船したのは確か3月10日だったと思います。翔邦丸という十三万トンくらいの船で石播の相生造船所を出港し、ドバイ経由でクウェート港に向かいました。船上ではいろいろ楽しい思い出がありました。ゴルフ練習場の使い古しボール（一個10円）を100個ほど持ちこんで、甲板から海に向かって打ちっぱなしもやりました（グリーンピースのみなさんごめんなさい）。ボールが無くなったあとはデッキゴルフを楽しみました。夜は毎晩のように船長、機関長らを相手にマージャンです。オイルショック後で燃料節約のために鈍足の航行で確か2週間くらいかけての航海ではなかったかと思えます。船長には旅費を巻き上げてやるとさんざ脅されましたが、またその一方で、船社会の裏側の勉強も一杯させてもらいました。クウェート上陸後はバールート経由でローマに行き、そこからミラノ経由でパリへと鉄道旅行をしました。バールート空港での乗り継ぎの際には、空港内に銃を構えた兵士が溢れていてうまく乗り継ぎができるのかかなり心配しました。このほかについても道中談が盛沢山ですが紙数の関係で省略させていただきます。

大学人生でもっとも忘れられないのは89年です。この年の6月には天安門事件があり、大ニュースとなっていたのですが、わたしは10月から翌年の8月初めまで10カ月間の在外研究でキャンベラにあるオーストラリア国立大学のオーストラリア-ジャパンリサーチセンターに滞在しました。家族全員を連れてのこともあってなかなか研究のほうは進捗しませんでした。広い一戸建て（日本流に言うとな敷地約270坪ほどの4LDK）の住まいを提供され、オーストラリアンライフをエンジョイさせていただきました。南に道路に面して広い芝生の庭があり当初、これはいいと思ったのですが、当地では太陽が北側から照らすということにすぐに気づかされました。それはともかく滞在したセンターは日本の経団連の援助で設立されたものなのですが、天安門事件に関連してオーストラリア政府が事件に批判的な中国人の留学生やらなんやらを一杯受け入れ、彼らで溢れかえっていました。一緒に滞在していた大蔵省派遣のW氏とこれじゃあオーストラリア-チャイナリサー

チセンターじゃないかと愚痴ったものです。研究のほうはあまり進まなかった（納税者の皆様申し訳ありません）と上で述べましたが、一方で観光や交友では非常に大きな成果を上げることができました。わたしの大学人生でもっとも楽しい時期だったと思います。当時輸入制限をしていたせいで走行距離 11 万キロ以上のスバルレガシーを 1 万 2000 ドル（1 豪ドル＝120 円くらいだった？）で買われました（帰国時には 6000 ドルで売りましたが）。このおんぼろ車でキャンベラからアウトバックの道路をブラックオパールの産地ライトニングリッジまでドライブ旅行に行ったり、10 日間ほどですが南太平洋クルーズに行ったり、ニュージーランド北島をドライブで一周したりしました（なおこれらはすべて時効にかかっています）。

友人にも恵まれ、帰国後の人生を非常に豊かなものにすることができました。ただリーマンブラザーズ破たんて失業の憂き目を見た S 氏や原発事故でいま苦勞している東電の K 氏など心にかかる人たちもいます。またパースからシンガポール経由での帰国途中の機内でイラクのクウェート侵攻の記事が新聞一面に大きく載っているのを読みました。これが今日の世界情勢の直接的なスタートの瞬間だったような気がします。

オーストラリアから帰国してみると、バブル崩壊後の日本経済がそこにありました。わたしは別に自慢するつもりはありませんが、このバブルはやがて崩壊すると感じていたので、手持ちの株を全部処分し、オーストラリアにもっていきました。当時の金利は現在と比べてもさらに高く、その利子でかなり余裕のある滞在生活をしました。ただ帰国後も銀行口座に預金を残しておいた（外国為替管理法違反）のがあだとなり、豪ドルの急落で結局、大損をしてしまいました。

1991 年には教授に昇任し、晴れて怖いものなしになりましたが、次第に雑務に追いまわされるようになり、「生涯一教師」でのんびりやろうという信念があやしくなりだしました。また 1998 年にはいわゆる「大学設置基準の大綱化」を受けて、本学でも一般教育担当の教員の専門課程への分属が行われました。わたしは「流通情報工学課程」というところに配属となり、新たな授業や卒論指導などに追われるようになりました。この結果、これまでコツコツと進めてきていた資産所有に関する研究を放棄せざるを得なくなってしまいました。当初は何か 2 刀流でとも思ったのですが、結局あきらめて「流通の先生」になりました。周りにいる民間企業で働く友人たちの苦勞の様を見れば、わがままを言えないというのがその気持ちでした。

だいぶ長くなりましたので、最後に、2010 年の定年退職の年へと進ませていただきます。人間には金があっても働かなければ気のすまない人種と、金があれば働きたくないという（ノーマルな）人種の 2 種類があるとわたしは思っているのですが、この分類法から行くと私はどうも後者のタイプのようです。別に大きな金があるわけではないのですが、子育てを終わり、ある意味での最大の社会的義務を果たし終わって、これからの人生は自分の時間を楽しみたいとの気持ちが定年間近になるにつれ強くなりました。10 数年前に購入した別荘も手入れが不十分で荒れつつありました。「帰りなんいざ田園へ」です。ただ昨年（2010 年）は長年の大学勤めの垢が研究室にたまりにたまってしまっていたため、そのあと片づけやら、本の整理などに追われて落ち着くことができませんでした。今年になりようやく一段落して、旅行や読書、映画、ガーデニングなどあれこれ楽しもうとし始めていたところへの大震災です。大阪に住み、神戸の大学を出ていたので 95 年の阪神・淡路大震災の衝撃もかなりのものでしたが、今回は直接にこれまで経験したことがない大きさの地震を体験し、さらに東北地方の多くの人たちが津波に理不尽に殺されていく様子を TV で見たり、また原発事故に関連して日本社会の抱える構造的欠陥の露呈を見せつけられたり、など本当に忘れられない年となってしまいました。

「明日をも知れぬわが身」という言葉があります。今回の地震と津波でそのことをあらためて思い知らされました。数年前の忘年会では一年先輩の友人がこれから 70 歳になるまでの人生計画を元氣よく話していましたが、それから 1 週間後には心筋梗塞で亡くなりました。わたしもこれからの人生についてあれこれと思うところはあるのですが、絵に描いた餅で終わってしまうかも知れません。後どれだけ元氣で生きられるのか、どれだけ時間が私に与えられているのか、所詮知ることはできません。ただその与えられた時間「与生」を後悔することのないように淡々と生きていきたいと考えている昨今です。